

聴覚に障害のある高校生への理解・支援

～学校選びから卒業後まで～



はじめに

聴覚に障害のある生徒が入学してきた…初めて聴覚障害者と接する方はまずこう思われるでしょう。

「コミュニケーションはどうしたらいいのか…」

「手話を覚えなければいけないのか…」

「わたしが聴覚障害のある生徒を教えることなんて…」

「高校の速い授業についていけるのか…」

確かに、聴覚障害があることで、授業についていけなかったりクラスでの人間関係がうまくいかなかったりすることはあります。

授業についていけず留年、退学してしまったり、良好な人間関係が保てずトラブルを起こしたりする例もあります。

こういった問題の背景には、聴覚障害に対する理解不足によるものが多々みられます。先生方が、聴覚障害について理解しないまま放置してしまうと、生徒は困っていることを言うことも出来ずぼんやりと学校生活を送ってしまうこともあります。

このような障害による困難を克服するお手伝いをして、聴覚障害のある生徒が充実した学校生活を送れるようにしませんか。

また、京都府には聾学校高等部があり、専門学科・普通科があります。障害理解・情報保障がなされている環境の中で、聴覚障害のある生徒たちが学校生活を送っています。聴覚障害があれば、聾学校高等部で学校生活を送るという選択肢も出てきます。この選択も含め、聴覚障害がある生徒へのサポート方法は多岐に渡ります。

この資料は聴覚障害に関する基本的な知識から始まり、高校選びから授業や学校生活の中での配慮、進路の選択に関するサポートまで述べてあります。この資料はあくまでもベースであり、生徒個々の状態に合わせた配慮をしてください。そして、ご相談がありましたら、下記へご連絡ください。

京都府聴覚支援センター

住所 〒616-8092 京都市右京区御室大内4 京都府立聾学校内

TEL (075) 461-8121

FAX (075) 461-8122

メール mimisien@kyoto-be.ne.jp

聴覚障害とは

○理解されにくい障害

聴覚障害は目に見えにくく分かりにくい障害ですが、その時点での言語発達やコミュニケーションのみならず、情緒や友だち作り、学力、社会経験の質など様々なことに影響を与えます。その幅広さや多様性については一言では説明しきれず、なかなか体験や実感がしにくい障害でもあります。



しかし、聴覚障害者本人と接して、話したり聞き返したりとコミュニケーションを重ねていくうちに接し方が分かり、少しの気遣いで障害による困難な部分を補えば、より充実した生活や円滑なコミュニケーションが可能となります。

○聴こえるしくみ

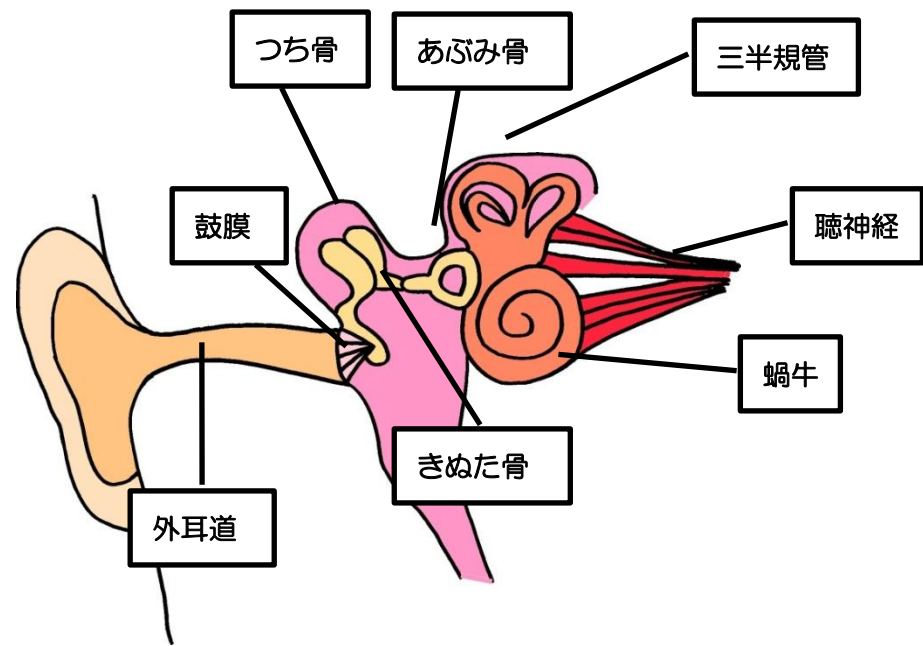


図 1：聴覚器官の部位と名称

音は空気の振動です。その空気の振動が耳の中に入ると、外耳道を通して鼓膜にその振動が伝わります。そして、耳小骨（つち骨・きぬた骨・あぶみ骨）に伝わり、蝸牛の中で電気信号に変わります。その電気信号が聴神経を通して脳に至るとそこで初めて聞こえることとなります。

けれども、これらの器官の中のどこかに機能不全があると、耳は聞こえにくくなったり、聞こえなくなったりします。また、その部位の違いによって、聴覚障害の種類も変わってきます。

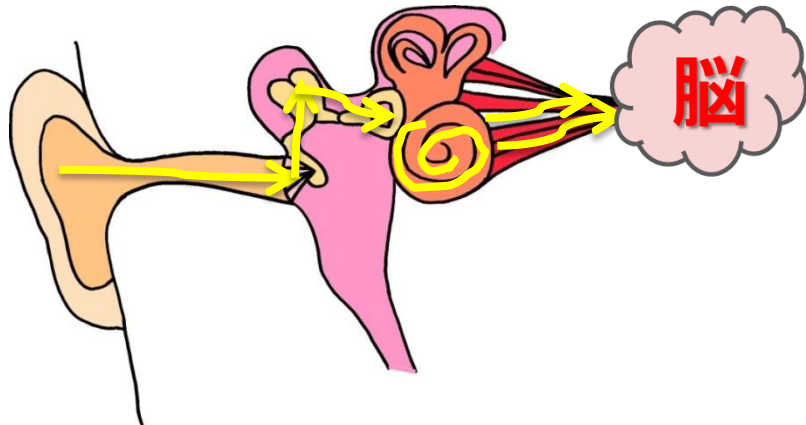


図 2：音声が入ってから聞こえるまでの経路

○聴覚障害の種類

聴覚障害を医学的に表すとき「難聴」という言葉を使います。「難聴」には種類があり、その程度も様々で聞こえ方も人によって異なります。

表 1：医学的に分類した聴覚障害の種類

感音性難聴	内耳から中枢(脳)までの機能不全による難聴で、音が小さくなるだけではなく、ひずんで聞こえたり頭に響いたりして音の判別が難しくなる。
伝音性難聴	外耳から中耳までの機能不全による難聴で、音が小さく聞こえる。
混合性難聴	感音性難聴と伝音性難聴が混ざっている。

教育上配慮を要する聴覚障害生徒のほとんどが「感音性難聴」です。

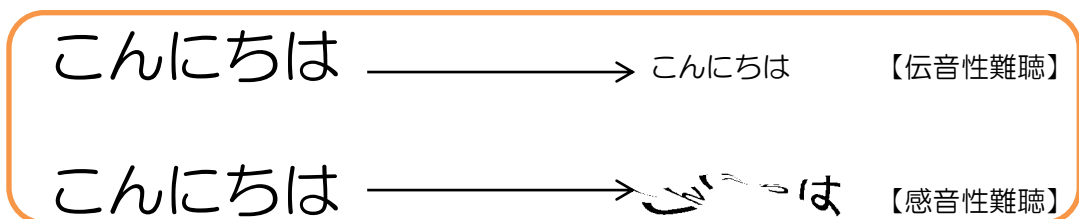
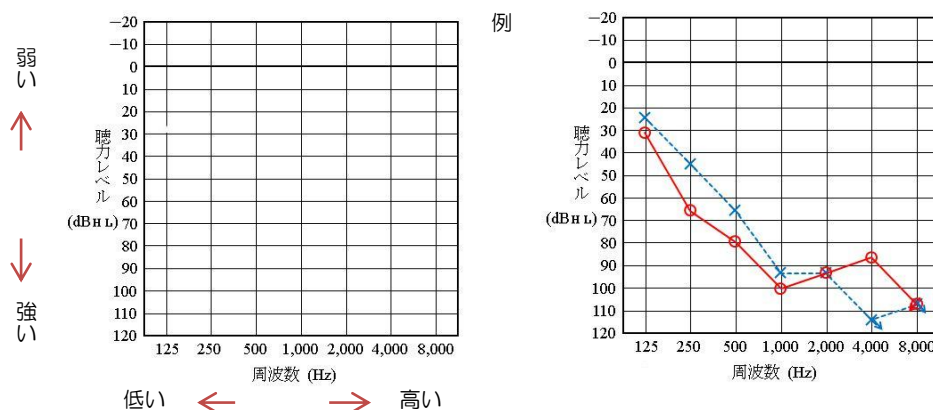


図 3：聞こえかたのイメージ

○聴力について

正常な聞こえに比べて、どの程度聞こえにくいのかを示すものが「聴力」です。正常値を厳密な規格として定めて聴力をあらわしたものが「聴力レベル」と呼ばれます。障害者手帳の等級も聴力レベルの平均数値を基準に判定されます。聴力レベルは様々な音の高さ（周波数）ごとに測定され、次のページに示すようなグラフで表示することができます。このグラフを「オーディオグラム（聴力図）」と言います。

- **聴力レベル（縦軸）** …単位は dBHL（デシベルエイチエル）
正常なきこえを基準値：0dBHL と表し、その人がきこえる最も小さい音のレベルのこと。
数値が小さいほど弱い音からきこえて、大きいほど強い音でないときこえない
- **周波数（横軸）** …単位は Hz（ヘルツ）
数値が小さいほど低い音、大きいほど高い音
- **左耳…×印の点線、右耳…○印の実線**
↙ …スケールアウト（最大音を聞き取れない状態）



以下に色々なオーディオグラムの例を示しますが、高音の方が聞きやすい人もいれば、低音の方が聞きやすい人もいますなど、聴力の状況は個々に異なります。

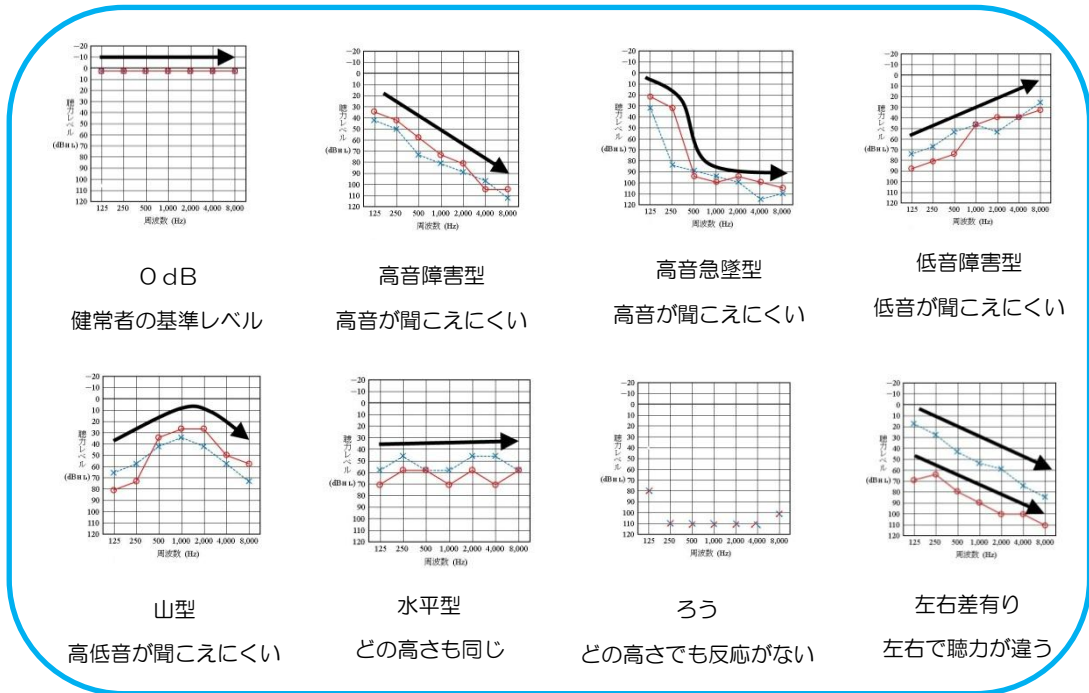


図5：オージオグラムの形と特徴（あくまでも一例です）

思春期は身体的にも心理的にも大きく変化を遂げる年代です。ストレスや病気、年齢などで聴力に変動が起こる可能性があります。また聞こえに変調を来した場合でも、できるだけ早めに治療を受けると効果も期待できます。異常を感じたときはもちろん、定期的（少なくとも年1回）に耳鼻科や聴覚支援センターなどで聴力をチェックするように指導しましょう。

表2：音の大きさの目安

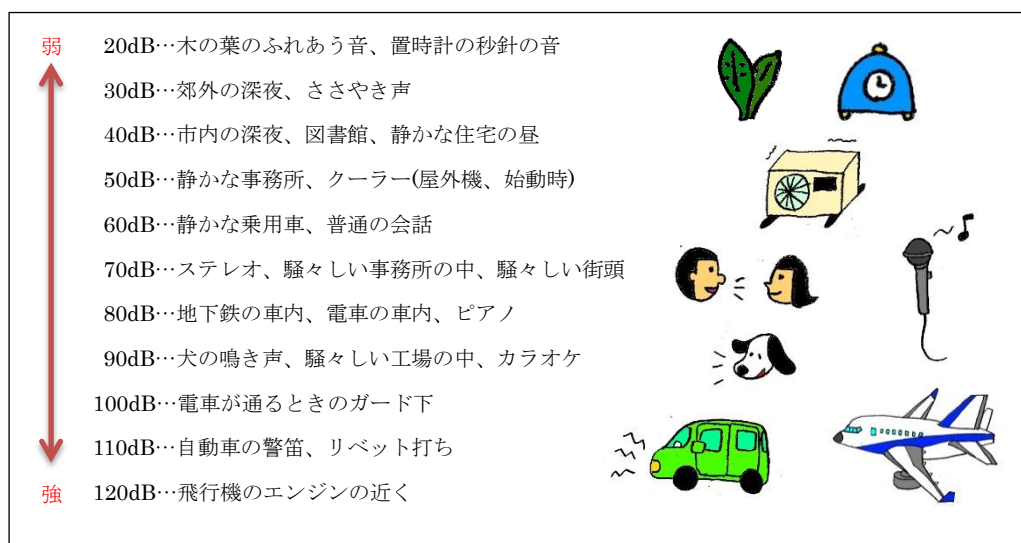


表 3：聴力の分類（WHO）

聴力の状況 数値は平均聴力レベルを示す	障害の状況 補聴器をしない時の聞こえかた・補聴器の効果など、補聴器の効果には個人差があり、特に重度・最 重度難聴者では大きくあらわれます。ここでは一般的な事項を表記しました。
軽度難聴 26-40dBHL	小さい声での会話、遠く離れた相手との会話が聞き取りにくい 騒音下や大人数の会議における会話の理解が困難なことがある
中等度難聴 41-55dBHL	普通の会話でしばしば不自由を感じる 正面からの大きい声での会話は理解できる
準重度難聴 56-70dBHL	大声で話しても理解できない場合がある 後ろからの話し掛けに気づかないことがある 補聴器を使用しても、その効果は異なり個人差が大きい 補聴器の効果を維持するために、騒音や反響などの音響条件に配慮 が最も必要となる
重度難聴 71-90dBHL	補聴器を着けなければ、耳元30cmほどの距離からの大きな声も聞 き取りにくい 補聴器を着けても、その効果は聴力・弁別能力・読話能力などによ り大きく左右される 対面した会話以外では、聴覚だけの理解は難しい
最重度難聴 91dBHL以上	補聴器を着けても、読話・筆談の併用がないと聴覚のみの会話は非 常に難しい 補聴器は読話の補助や環境音の把握・発音のコントロールなど、聴 覚による補助の手がかりを得る上で補助的に役立つことがある

上記の聴力の分類は「ピーピー」「ブーブー」などの検査音でどの程度弱い音を聞き取ることが出来るかどうかを測定して表れた数値（dBHL）で大まかに分類しているものです。

この検査の他に、単語や単文を用いてことばの聞き取り能力を調べる検査を行うなど、実際に聞こえる音を用いた方法もあります。また、年長者になると本人の聞こえに関する主観的な評価（やかましさをわずらわしさ、聞こえに関する困り感など）についてのカウンセリングも重要なこととなります。

○身体障害者手帳について

身体障害者手帳を持つことによって、補聴器の支給をはじめ手話通訳の依頼といった援助を受けたり、税の減免、公共交通機関の運賃割引などの制度を利用したりすることができます。

身体障害者福祉法に基づいて、聴覚障害の場合だと下記の表のように等級が割り当てられます。等級によって受けられるサービスも違ってきます。

交付を行いたい場合、まず市町村が指定している医師の診断書が必要になります。

表 4：身体障害者手帳の等級（聴覚障害の場合）

等級	聴覚障害のレベル
2 級	両耳の聴力レベルがそれぞれ 100 dB 以上のもの
3 級	両耳の聴力レベルが 90 dB 以上のもの
4 級	1. 両耳の聴力レベルが 80 dB 以上のもの 2. 両耳による普通話声の最良の語音明瞭度が 50% 以下のもの
5 級	
6 級	1. 両耳の聴力レベルが 70 dB 以上のもの 2. 一側耳の聴力レベルが 90 dB 以上 他側耳の聴力レベルが 50 dB 以上のもの

身体障害者福祉法より

コラム

聴覚障害者は日常言語が耳に入りにくい分、ことばを覚えづらい面があります。特に言語習得期である乳幼児期から聴覚障害がある場合には、その傾向が強くみられます。発音や発声のしにくさだけではなく、文法や言い回し、漢字の読み方を間違えてしまったりニュアンスがつかめなかったりすることがあります

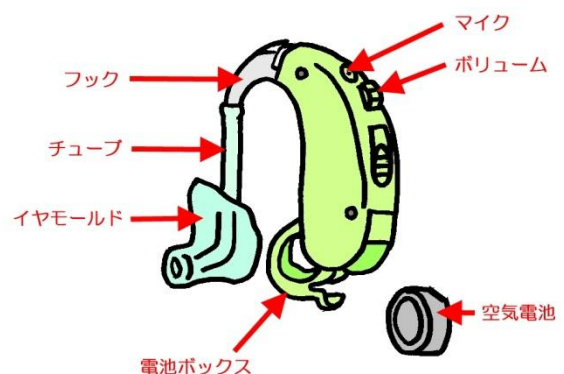
入ってくる情報が限られている上に、このような傾向が中高生になっても残っている場合は、余計に理解が難しくなり勘違いや誤解を起こしやすくなります。一見、不自由なく軽い会話ができている、時と場合・対話の相手やその情報の量と内容によっては、理解が難しくなることがあります。

補聴器・人工内耳について

○補聴器

昭和時代後半から科学技術の進歩により小型化、高出力化が進みました。また、補聴器がデジタル方式に変わり、アナログ補聴器の課題であったノイズの抑制や細かな音質調整が可能となってきました。

現在ではデジタル補聴器を装着している生徒が多いのですが、補聴器がいかに進歩したといっても、健聴者と全く同じように聞こえるわけではありません。補聴器は聞きたい音が歪んで聞こえたり、音が適度な強さに聞こえなかったりしてしまうため、完全に聞こえを保障する機械ではありません。



しかし、個人個人の聴こえ方に合わせた適切な調整を行えば、無理のない聴覚活用が可能になります。聾学校・聴覚支援センターでは、その調整を行っています。

補聴器の種類は主に箱形・耳かけ形・挿耳形に分かれます。それぞれメリットとデメリットがあるので、聴覚支援センターを含めた専門知識がある場所に相談をしましょう。

箱形補聴器



耳かけ形補聴器



挿耳形補聴器



図 7：主な補聴器の種類

費用については、種類によって数万円ほどのものから数十万円もするものまであります。身体障害者手帳を所持している場合は障害者総合支援法に基づいて全額費用の1割負担になります。また、手帳を所持していなくても、住んでいる市町村が助成制度を行っている場合は、指定医師の診断書などの条件が整えば助成を受けることができます。助成の種類や程度は市町村によって異なるので、事前に確認しておきましょう。

○人工内耳

人工内耳とは補聴器と同じように聴覚を補う装置で、手術が必要になります。補聴器は音を強めて鼓膜から伝えるのに対し、人工内耳は内耳に挿入された電極から直接聴神経を電気刺激して音を伝えます。

中途失聴の場合、個人差はありますが、周りの人との会話も可能になり電話もできる人もいます。先天性の場合、重度・最重度の感音性難聴児には早期の手術と訓練によって自然な聞き取りや話し言葉の習得が期待されています。人工内耳の機器の調整・メンテナンスは現在医療機関でのみ行うことができます。

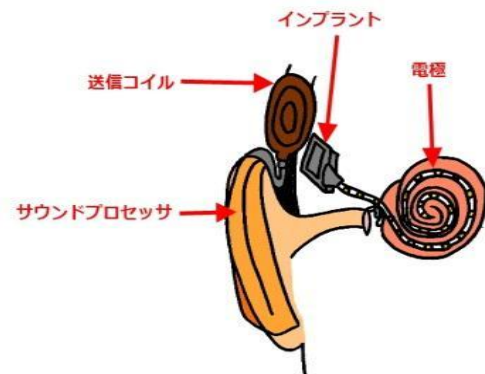


図 8：人工内耳 各部名称



OFM 補聴器

教師の持つ「FM マイク」から FM 波が送信され、生徒が携帯する「FM 受信機」が FM 波を受信します。この FM 波によって生徒の補聴器に教師の声が送られるため、話者と離れた場所での聞き取りを向上させることが可能です。

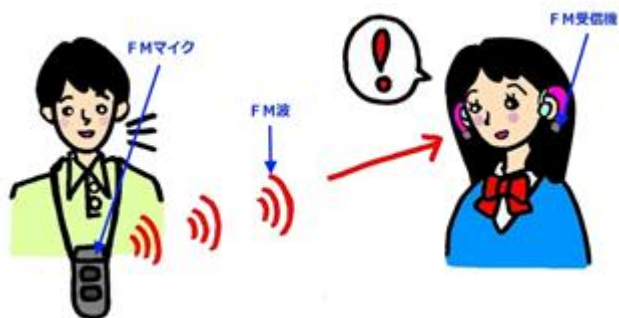


図 9：FM補聴器のしくみ

話者が限られる場合特にほとんど教師が話す授業に有効です。FM 補聴器は使用する教師、周りの生徒、本人の使用意欲があり、教師が使用管理方法を覚えればスムーズに活用できます。

活用できる条件

- 本人が補聴器による会話が大体できる（会話上補聴器を必要不可欠とする）
- 日常会話と比べて授業中に聴きづらさがみられる
- 周囲に常時、騒音がある（通常学級では 70-80dB ほどの騒音）
- 話者との距離が 3m を越えることがある

○音環境の整備

正常な耳であれば騒がしい環境であっても自分の聞きたい音声だけを拾い上げて聞くことができます。（カクテルパーティ効果）補聴器や人工内耳は集音した音を unnecessary 雑音も含めてすべて処理してしまいます。最近は雑音を抑制する機種も多いですが、性能は完全ではありません。補聴器や人工内耳は「聞きたい音声」も「聞きたくない音声」も一緒に耳に届けてしまいます。そのため、補聴器や人工内耳を使用する場面では以下の例のような環境整備が大切になります。

【簡単にできる整備の一例】

他生徒に静かにしてもらうように理解を得る

教室の窓や戸を閉める

ゆっくりと明瞭に話す

様々なコミュニケーション

○読話（口話）

相手の唇の形や動きを読み取って相手の言葉を理解する方法を読話と言います。また、残っている聴力を活用しながら読話を行い、発音によってコミュニケーションをとることを口話といいます。

聴覚障害のない人とも普通の会話に近い形でコミュニケーションできるメリットはありますが、相手の唇の動きに神経を集中して話の流れから内容を類推するため、緊張感を強いられます。また読話の効果は話し相手との会話経験や状況把握などのスキルが大きく影響するため、いつでも同じように理解できるものではありません。

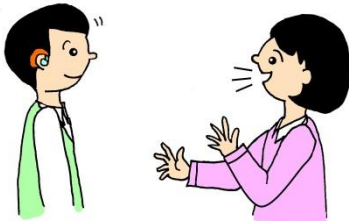
・読話でコミュニケーションするには

一度話してみて意味が通じない
→言い回しを変えてみる

口の形が似たような言葉（例：たばこ と たまご）
は間違しやすいのでジェスチャーをつけるなどして
通じやすくする

唇の動きをはっきりさせ、ややゆっくり目に
話す。文節や意味などで間をおく

相手の方に顔を向け、口元が
はっきり見えるようにする



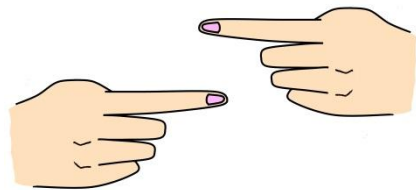
新しい言葉や難しい言葉、日常あまり使わない言葉などは紙に書くなどして理解を助ける

○筆談

確実で最終的な補助手段になります。騒音などで聴覚活用ができなかったり、手話や読話の途中で新しい言葉がでたりしたときに文章のきっかけや単語の頭などを書くことでスムーズにコミュニケーションができます。

○手話

聴覚障害者のコミュニケーション方法として一般的に知られていますが、それでも手話を日常言語とする聴覚障害者は全体の数%程度です。聴覚障害者同士の日常会話に適しています。



コミュニケーションの状況は、聴力・失聴年齢・教育歴・家庭環境・知的発達などの要因によってかなり多様に分かれていますが、程度が重くても、友だちと助け合いながら学習活動に意欲的に参加し、自然にとけ込む場合もあります。その一方、程度が軽くても一見普通に聴こえているように見えてしまうために、必要な配慮を受けられず授業についていけなくなったり、クラスで孤立してしまったりすることもあります。

必要な配慮

○配慮を行うにあたって

- ・聴覚障害生徒自身・専門家などがクラス全体に話す場を設けましょう。
- ・聴覚障害についてクラス全体で話し合ったり、理解したりする場を設けましょう。

○基本的な配慮

①明瞭な話し方

- ・聴覚障害生徒のためだけではなく、生徒全員のためにも明瞭な話し方を心がけましょう。大きすぎる声・ささやき声・こもりがちな声は分かりにくいです。
- ・適当な速さ（ニュースよりややゆっくり目が目安）で音節や句など意味の切れ目で少し間をとりましょう。
- ・聴覚活用する生徒でも口の形をヒントにしている人は少なくありません。口の形も意識して話しましょう。



②目線

- ・基本的にどの聴覚障害生徒でも顔がしっかり見えるように話すことが大切です。
- ・目線を時々送って伝わっているかどうかのアイコンタクトも取りましょう。
- ・板書をするときと話すときを分けて進めましょう。黒板に向かって話されると話が分かりません。

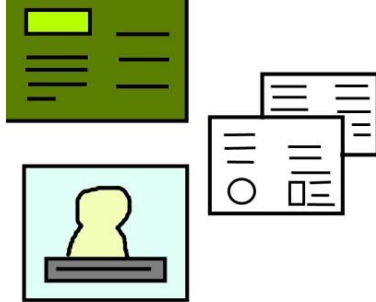
③座席

教師の声がよく届き、顔と口元が明るく見え、他の生徒の様子が見える

「前から2列目あたり、中央～やや窓寄りの席」が一番安心です。

このことを伝えたくて、聴覚障害生徒本人の希望も聞いて決めておきましょう。

④視覚的な工夫



- 板書やプリントなどの活用
(見る部分の指示も明確に)
- 身振りや指さしなども活用
(話を理解するときのヒントになる)
- 板書などでキーワードを示しましょう
- 動画や音楽など音声的な教材を用いる場合
→字幕入りのものを選んだり、
原稿用紙を渡したりしましょう

⑤授業中の教師の動き

- 話を始めるときは呼びかけを行い、教師に注意を向けられる間をとりましょう。
- 生徒全員に話しているのか、特定の誰かを注意して話しているのかの区別ができるように工夫しましょう。(特定の人の場合手で指し示して名前を呼ぶなど)
- 同じ言葉の繰り返しだけではなく、別のことばで言いかえるようにしましょう。
(例：昼食を食べる→昼ご飯を食べる)
- 課題や指示を出すときは、簡単でもよいので個別に伝えましょう。

⑥時間の配分

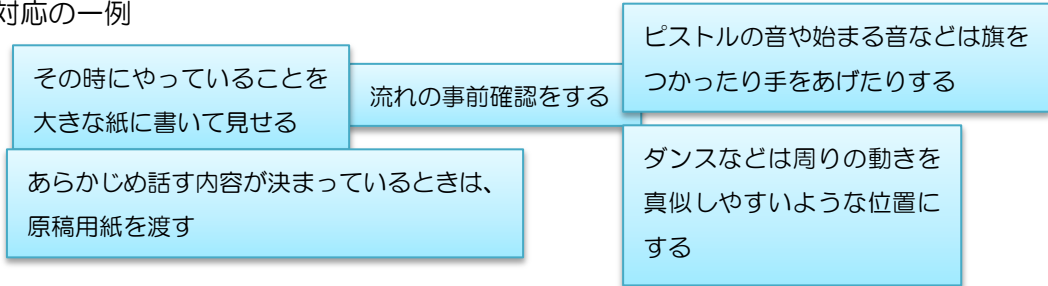
- 聴覚障害生徒が聴覚活用したり、読話したりするのに人一倍の集中力を要します。黙読や書き取りなど、聴いたり読話したりする必要のない時間も入れましょう。
- 余裕をもって話せるように時間の配分も考えておきましょう。

学校生活全体の理解・支援の推進

○学校行事における支援

全校集会や体育祭、文化祭などの大規模な学校行事の時は本人の状況に合わせて対応方法を考えましょう。事前に本人にどういう対応をするのか話しましょう。

・対応の一例



○聴こえやコミュニケーションの管理

- ・聴覚障害生徒の聴こえや発音等をサポートするためには専門家や保護者の方と連携協力をしてください。
- ・補聴器使用による聴覚疲労・中耳炎などの症状による聴力変動に注意しましょう。
- ・聴こえや補聴器、補聴援助機器などの調子が悪いと感じたらすぐに専門家に申し出るように指導してください。
- ・電池切れ、コードやイヤーフックの破損など簡単な修理や対応ができるようにしましょう。もしくは生徒自身に自分でできるように指導することも可能です。

○聴覚障害生徒の主な進路

・4年制大学・短期大学・専門学校



たくさんある進学先の中には、障害学生支援が充実している学校があり、ノートテイクやパソコンテイクなどの情報保障をスムーズにしてもらえるところもあります。逆に障害学生を受け入れた経歴があまりなく、とまどう学校もみられます。

試験や入学の際に、受験校に聴覚障害がある旨を連絡するように生徒本人に指導・援助し、具体的にしてほしい援助などについて受験校が前もって準備ができるようにしておきましょう。

最近は障害がある人の受験時における補助の説明が冊子などに出ており、出願の1か月前に連絡をしなければならないところもありますので、生徒本人の希望などを常に把握して指導しましょう。

・就職

就職活動をする際に自分の障害について伝えられるように指導・援助しましょう。

心がけること

○100%理解は難しい

聴覚障害生徒はどんなに周到な準備をしても、どんなに努力をしても、100%理解することは難しいですが、それに近づけるように意識しましょう。

○まず顔を見て、分かりあえるまで

機器の準備や手話の勉強など特別なことよりも先に顔を見て話をしましょう。そして、聴覚障害生徒が繰り返し尋ねる時や不明瞭な発音で何度も話すことがあっても、寛容であってください。分かりあえるまで繰り返しましょう。

○話しやすい雰囲気作りを

質問しやすいクラスの雰囲気作りを心がけましょう。

○クラスの一員として

聴覚障害があるから、と日直やクラス分担、宿題の量を軽減することはないようにしましょう。クラスの一員としてクラスのルールに従うように指導しましょう。対等な関係で接しましょう。

○対等になるための援助

「特別扱いするのは良くない。普通に接すれば良い」という考え方がありますが、聞こえにくいことへの援助によって対等に接することができることを念頭におきましょう。

○本人のニーズを聞く

「どんな援助をするべきなのか」は聴覚障害者とのつき合いの中で、その人自身からニーズを聞いて応えるというスタイルを基本に話し合ってください。

○疑問や不満があっても

聴覚障害生徒の言動に触れて疑問や不満を持った時、相手が聞き難い、障害があるから仕方がないと黙って済ませてしまわず時間をかけてその疑問を解決していきましょう。

高校での支援をすすめるために

—個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成と活用—

聴覚に障害のある生徒がより円滑に高等学校生活を送るには、ひとり一人の障害による困難性をふまえて、適切な支援を整理・検討するための「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」を作成・活用するのが効果的です。

京都府聴覚支援センターでは、希望される方について「中高移行支援会議」を開き、そのお手伝いをします。中高移行支援会議のメンバーは、御本人と御家族の方々、中学校・高等学校の先生方で構成し、「学校および本人・家庭が相互に支援に努めること」を整理しながら、入学後の高校生活に備えていくカルテを作成します。この会議が中学校での志望校決定から高等学校と連携して同時並行ですすめることができれば、より効果的な支援につながります。

京都府聴覚支援センター

住所 〒616-8092 京都市右京区御室大内4 京都府立聾学校内

TEL (075) 461-8121

FAX (075) 461-8122

メール mimisien@kyoto-be.ne.jp